

# 「復興とは何かを考える委員会」 とりまとめに向けて

日本災害復興学会

復興とは何かを考える委員会

幹事 永松伸吾

# はじめに

- 「復興とは何か」に一義的な定義を与えることはできない！
  - 考え方の違いというよりは、むしろアプローチの多元性の問題
- アプローチ毎に整理して、それらの相互関係を示しつつ議論の全体像を展望することを試みる。

# まとめの方法

- 基本的にこれまでの委員会における発表やそれに関連する文献を素材とする。
- 阪神・淡路大震災以降の復興に関する文献については、一応目を通したものの、委員会の議論でかなりの程度集約されていると思われたので、明示的には加えていない。

# 復興とは何かを考える委員会:これまでの活動

## 平成21年

**第1回** 5月30日(土)14:00~17:00(東京)

中林一樹「復興とは」委員長(首都大学東京)

木村拓郎 企画委員長(社会安全研究所)

・復興理念、事前復興論、被災者生活再建

**第2回** 6月13日(土)13:00~16:00(大阪)

室崎益輝 会長(関西学院大学教授)

村井雅清 副会長(被災地NGO協働センター)

・復興理念、阪神大震災、被災者支援

**第3回** 7月11日(土)14:00~17:00(東京)

稲垣文彦(中越防災安全推進機構)

田中 淳(東京大学)

・中越地震、集落復興、復興支援、高齢者

**第4回** 8月8日(土)14:00~17:00(大阪)

矢守克也(京都大学)

・四川大震災、圧縮される復興、語る

**第5回** 9月12日(土)14:00~17:00(東京)

渥美公秀(復興デザイン研・大阪大学)

宮原浩二郎(関西学院大学)

・復興理念、中越地震、復興研究

**第6回** 10月10日(土)14:00~17:00(大阪)塩崎賢明(神戸大学工学部)

上村靖司(長岡技術科学大学)

・住宅再建、中越地震、復興支援

**第7回** 11月14日(土)14:00~17:00(大阪)

津久井進・山崎栄一(復興法制度研:弁護士・大分大学)

山中茂樹(関西学院大学)

・復興基本法、憲法、人間復興、復興の立脚点

**第8回** 12月12日(土)14:00~17:00(東京)

越山健治(人と防災未来センター)

大矢根淳(専修大学)

・復興感、復興曲線、復旧曲線、復興研究

## 平成22年

**公開研究会** 1月11日(月)11:30~16:00(関西学院大学上ヶ原キャンパス)

①復興とは何かを考える・中間報告(永松伸吾)

②公開ワークショップ「災害復興とは何か」

コーディネーター 中林一樹(首都大学東京)

発言者 加藤孝明(東京大学)

矢守克也(京都大学)

稲垣文彦(中越防災安全推進機構)

魚住由紀(フリーアナウンサー)

コメンテーター 室崎益輝(関西学院大学)

**第9回** 2月13日(土)14:00~17:00(東京)

加藤孝明(東京大学) 饗庭伸(首都大学東京)

復興まちづくり・復興ガバナンス

+君嶋福芳(災害ボランティアオールとちぎ)

**第10回** 5月15日(土)14:00~17:00(東京)

浦野正樹(早稲田大学)、吉川仁(首都大学東京)

レゾジリエンシー、関東大震災

**第11回** 6月12日(土)14:00~17:00(大阪)

小林郁雄(神戸山手大学)、野崎隆一(神戸まちづくり研究所)

阪神・淡路大震災、復興支援会議、市民活動、マンション再建

**第12回** 7月10日(土)14:00~17:00(東京)

澤田雅浩(長岡造形大学)、木村玲欧(富士常葉大学)

中越地震からの復興、復興カレンダー

**第13回** 8月28日(土)14:00~17:00(大阪)

林春男(京都大学)、広原盛明(龍谷大学)

生活復興モデル、開発と復興

**第14回** 9月18日(土)14:00~17:00(大阪)

黒田裕子(阪神高齢者・障害者支援ネットワーク)、永松伸吾(関西大学)

## ワーキンググループの活動

6月15日 第1回WG(関西学院大学)

7月1日 第2回WG(関西学院大学)

7月15日 第3回WG(関西学院大学)

収集した文献を分担して、論点整理作業に取り組んでいる。

11月12日 第4回WG(人と防災未来センター)

12月8日 第5回WG(人と防災未来センター)

平成22年

5月6日 第6回WG(関西大学)

5月25日 第7回WG(関西大学)

# 議論の対象となる「復興」とは

- 破壊や疲弊からの出発（室崎）
- 但し、現在の議論は自然災害を対象としたものにほぼ限定されている。
- 大規模事故、戦争、紛争などとの共通性は担保されない。

# なぜ復興を問うのか

- 災害復興に対するニーズの増大(永松)
  - 温暖化・都市の高度化などによる災害リスクの不確実性の増大。
  - 防災から減災へのパラダイムシフト。
  - 高齢化など社会の脆弱性の増大。
- 平時の復興学が必要(加藤孝明)
  - (1) 未経験、未知の復興に対応するための知見と蓄積をしていく。
  - (2) 平時の社会のあり方に対する問題提起をしていく。

# 「復興とは何か」という問いに対する 回答の4つのアプローチ

1. 理念的アプローチ(philosophy)
  - どのような状態を目指すか。
2. メカニズム的アプローチ(mechanism)
  - 復興に必要な要素とは何か。
  - それらの関係性や構造はどのようなものか。
3. ガバナンス的アプローチ(governance)
  - 復興の主体は誰か
  - 復興には誰がどのように関わり、どういった手順が必要か
4. 能力的アプローチ(resiliency)
  - 復興を成し遂げる力や能力とは何か、それをどのように高めることができるか。
  - 必要な社会の制度はどのようなものか

現場  
実践

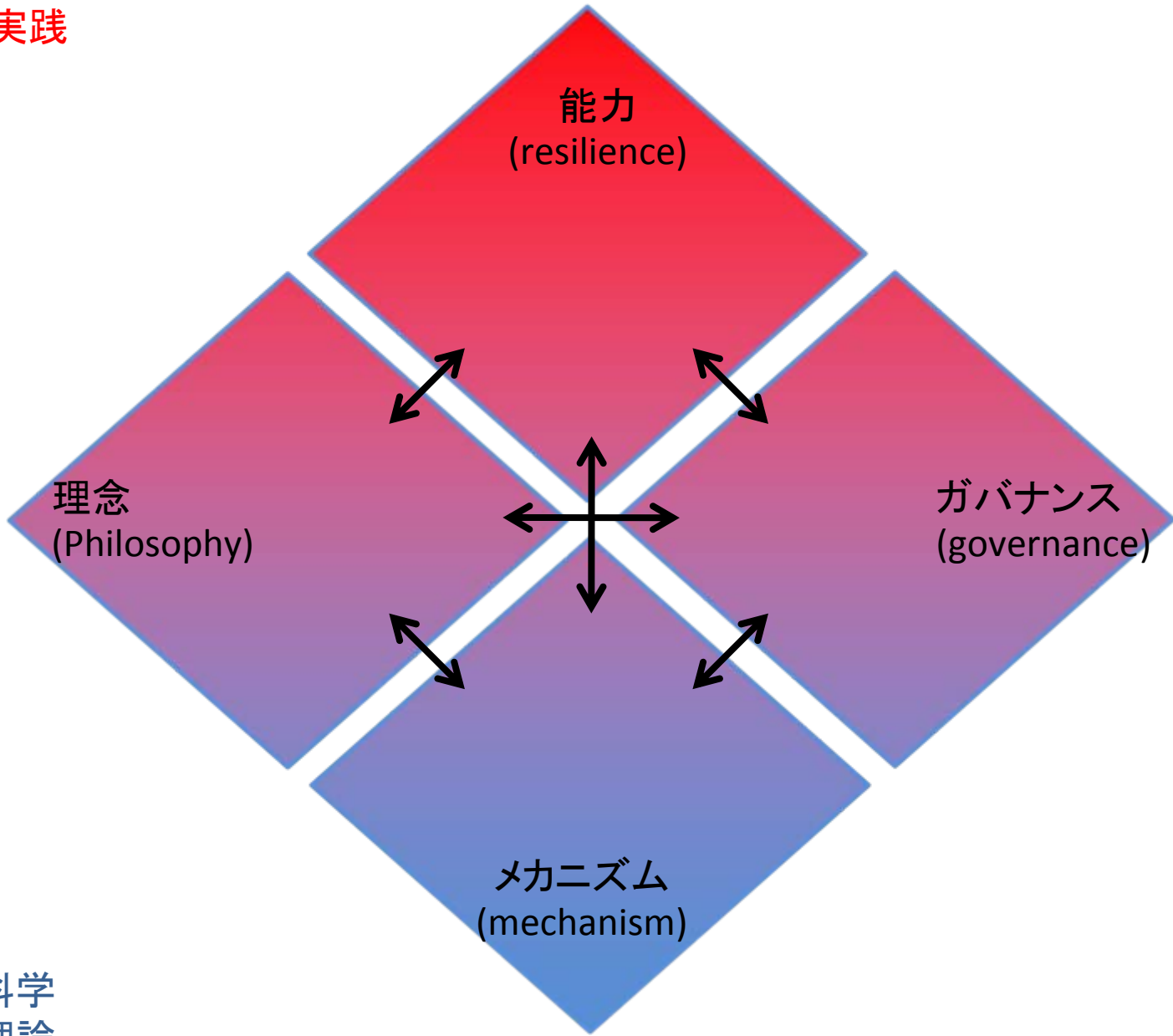
能力  
(resilience)

理念  
(Philosophy)

ガバナンス  
(governance)

メカニズム  
(mechanism)

科学  
理論





# 理念的アプローチ(philosophy)

- 都市基盤の復興から人間の復興へ(「人間復興」)
  - － 人間の復興とは大災によって破壊された生存の機会の復興を意味する...道路や建物はこの営生の機会を維持し擁護する道具立てに過ぎない、これらを復興しても本体たり実質たる営生の機会が復興せられなければ何もならないのである (山中茂樹)
  - － 災害復興はそこで生きてきた人たちの生活や商売などの回復を成し遂げなければならず、都市機能の回復はその折り合いをつけながら必要最小限で行ってもよい (塩崎賢明)
  - － 「暮らし」があって「住まい」がある、「住まい」があって「暮らし」があるのではない。(村井)
    - 「都市という器があって人間の生活があり、人間の生活に従属する形で都市という器がある。都市と人間とは双方向。」(加藤孝明)
  - － 「復興は都市が復興するのではなく、都市のなかに人間がいる。人間が復興するのが大切なのだ。」(室崎)
  - － 「災害復興:災害前とまったく同じ施設、機能に戻すのではなく、地域が災害に見舞われる以上の活力を備えるように、暮らしと環境を再建していく活動のこと」(被災者復興支援会議)
- 「最後の一人まで」
  - － 「多数者の幸せが一定の水準を確保されている社会では、多数者の優先より少数者を尊重する原理に転換しなければ、社会的に弱い少数者が切り捨てられがちである。被災者の最後の一人が生活を再建できるまで、復旧は終わらない」(市民とNGOの「国際」防災フォーラム)
  - － あるべき復興とは、一人一人のかけがえのない生に思いを馳せ、希望をもって生きていく現実と一緒に構成していくこと。(渥美)
  - － 「人間のためにとは、被災者が何を望んでいるかではない。本質的な人間の「自由」「自立」とは何かということが大事。」(村井)
- 被災地の自決権に配慮(山中)
  - － 復興とは被災地の自治を基調にしながら、被災者個人の自律を回復することである (山崎栄一)

# 理念的アプローチ(philosophy)

- より災害に強い社会を目指すべきか？
  - 生活復興7要素(林春男)でも4番目に「そなえ」が挙げられる。
  - 次の段階の開発が災害をもたらさないようにするための連続的なシステム(広原)

他方で

  - 復興は元に戻して生活することが重要。一足とびに次への災害の復興、災害の備えを復興の中で全部一緒にやってしまう必要はない(塩崎賢明)

という意見も。阪神大震災の復興過程で防災性を高めることを錦の御旗に大規模な開発が繰り返されたとする見方。
- 『世直し』-『立て直し』論(矢守克也)
  - 災害の発生を、過去から現在へと至るスムーズな社会の移行を断絶させたものにとらえ、抜本的な「新規まちづくり」へと邁進するという反応(世直し)
  - 未来を真性の未知としてではなく予定済の将来という形で確保しようとする働き(立て直し)
- 「再び盛んになる」こと
  - あるべき復興とは何かというと、被災地社会が再び元気になる、再び盛んになるということ。盛んになるというのは、被災者が、地域や社会を「地域の一員として(コモン、共の人間として)肌で感じる」ということ。(宮原)
- 回復力・復元力の獲得
  - 「システムの外部依存による不安感やあきらめ感の増大が回復力を阻害している。もう一度内部化する、自分たちで何か考えてやっていくんだということが復興まちづくりに必要」(稲垣)(稲垣文彦)
  - [44] 環境の変化に迅速に適応できる創発適応力、回復できる力を獲得できていくのがいい復興である(上村靖司)  
⇒能力的アプローチ(resiliency)への展開
- 持続可能性の獲得
  - 「地域が自律的に発展していけることが「創造的」な復興である。」(中林)  
⇒能力的アプローチ(resiliency)への展開
- 復興をいかにするか  
の三つの条件①**歴史性と地域性**、②**持続性と共生性**、③**自立と自治**(室崎益輝)

# メカニズム的アプローチ(mechanism)

復興に必要な要素とは何か

– 生活再建7要素モデル(田村・林)

- (1)すまい(2)つながり(3)まち(4)そなえ(5)こころとからだ(6)くらしむき(7)行政とのかかわり

– 個人の復興の要素 ①住宅②集落③いきがい④仕事・収入⑤再建資金⑥文化(木村拓)

復興の指標は何か

– 復興曲線(中林)

- 客観的状态・集合的評価

– 生活再建カレンダー調査(木村)

- 主観的心理状態・集合的評価

– 復興プロセス研究会・復興感曲線(宮本)

- 主観的心理状態・個別評価

– 復興熟度指標(上村)

- ガバナンスの評価

個人の復興感の形成メカニズム

– 生活再建心理モデル(立木)

被災社会の復興メカニズム

– 総合的復興政策モデル(林)

– (1)都市基盤(2)生活支援・いのち(3)住まい(4)仕事・にぎわい(小林郁雄)



# メカニズム的アプローチ(mechanism)

- コミュニティ・社会と個人の生活復興の代替・補完関係
  - 良い復興にはバランスが必要。(1) 急ぐ生活再建と時間のかかるまちづくり(2) 個人の最適化とまちの最適化(3) まちの最適化と都市・地域の最適化(4) 今の市民×未来の市民 (加藤孝明)
  - コミュニティの再建と個人の再建が依存関係(補完関係)にある。(田中淳)
    - 復興とは人間で、複数の人々が同じ目的で何かを一緒にやっているイメージ (上村靖司)
    - 「復興の主語は「人」というよりは「人々」という感覚で捉えている」(稲垣) (稲垣文彦)

# メカニズム的アプローチ(mechanism)

- 被災者の立ち位置の変化が復興感につながる
  - 自分の生活を、こういう私は被害にあったんだ、こういうふうになんか乗り越えてきたんだという語り方が変わることは人生そのものが変わることだと信じている (矢守克也)
  - 「被災者の立ち位置が変わっている。支援をされる形から自分が何か役割を持ってやっている。」(稲垣) (稲垣文彦)
  - 「脳卒中で二回倒れて片マヒの人がまけないゾウをつくっている。避難してからは要援護者ではなくて教える側になっている。」(村井) (村井正清)
- 復興における時間の関係
  - 復興を語るときに、一人一人の被災者、あるいは被災地に実際に流れている、生きている時間というものにセンシティブであるべき。本当に同じ時間がみんなに流れているのか (矢守克也)
    - 復興の不可逆性の前提に対する挑戦

# ガバナンス的アプローチ(governance)

- 復興プロセスに必要な要素
  - ①連続性②戦略性③補完性④共創性⑤変革性⑥包括性 (室崎益輝)
- 被災者にとって、次世代にとっての復興であるための7つのP
  - ①方針②計画③被災者④過程⑤参加⑥政策⑦シンボル (中林一樹)
- 行政の復興計画の3Q
  - ①Quantity 量②Quality 質③Quickness 速度 (中林一樹)
- 良い復興に関する三つの「正義」
  - (1)科学的な正しさ(2)主体の合理性(3)決め方の合理性 (饗場伸)
- 専門家の役割
  - 復興まちづくりにおける専門家支援の重要性(小林)
  - 「心のケア」「復興」といった言葉が、その言葉をいろいろと使うことや、専門家そのものための活動が目的となってしまう、本当に被災者のためになっているのか、誰の為の活動かを忘れさせてしまう。(渥美)
  - 正しいかどうかを判断するのは、都市計画家でないことははっきりしているが、おそらくそのときの価値観に基づいて、少し先読みした価値観に基づいて地域社会が判断するというのが多分正しい答えだと思う。(加藤孝明)

# ガバナンス的アプローチ(governance)

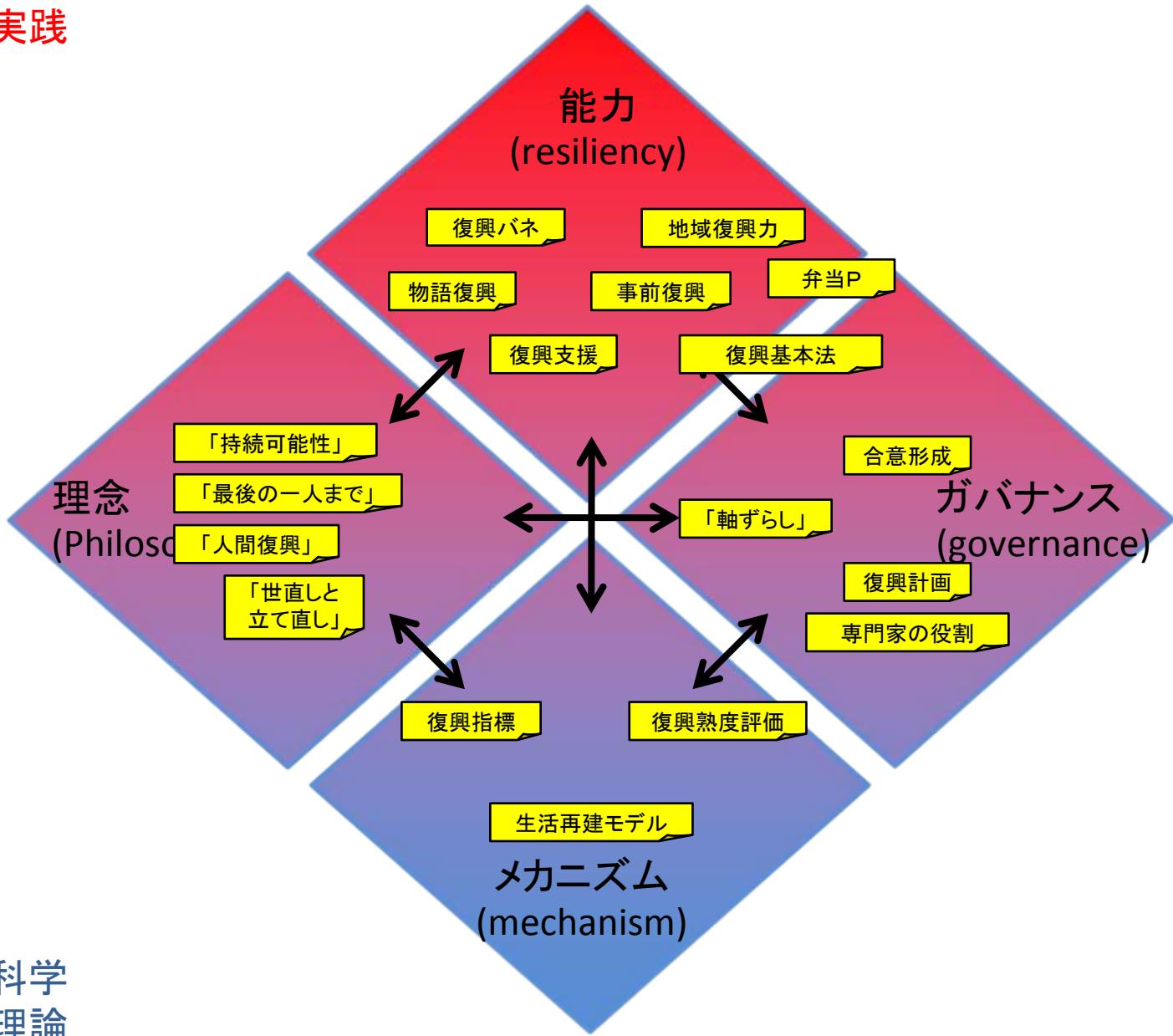
- 復興の主体は誰か
  - 少なくとも行政ではない。
  - 「復興のプロセスの中で、復興の主語は人間のためにと。「被災者」だと被災者にはいろんな人がいるので100%にならない。結局は人間の社会にとってということが大切。」(村井) (村井正清)
  - 今の被災者にあんたたちどうしたいのということを問うことが必ずしも適切ではないのでは。中越は次世代がいるかいないかが問題。(上村)
  - 日本にとっての復興、中越地域にとっての復興、集落にとっての復興、個人にとっての復興は必ずしもイコールではない。どれを採用するかは問題(永松)
- 合意形成のあり方
  - 「合意形成というプロセスの意味は、被災者一人ひとりの『多義的復興』と、被災地・社会の『一義的復興』はどのように調和できるか。」(中林)
  - 計画型・課題解決型・直線型に対して、創発型・プロセス重視型・非線形型(稲垣)
  - 「総論と各論の問題がある。総論は早く決める、各論はゆっくり決める。」(室崎)
  - 「合意形成→アクション→議論→問題設定→合意形成→アクションという循環型。決めたからそれで永遠に続けるというわけではない」(上村)
  - 時間的制約(中林・室崎)⇔「待つ」ことの重要性(渥美)

# 能力的アプローチ (resiliency)

- Resiliency: 大状況の中での客観的な環境や条件を見る過程では見過ごされがちな、地域や集団の内部に蓄積された結束力やコミュニケーション能力、問題解決能力に目を向けていくための概念装置 (浦野)
  - 復興バネ (室崎)
    - 気概のバネ・反省のバネ・制度のバネを働かせる
  - 地域復興力 (中林)
    - 三つのQ、7つのPにより構成
    - それを高めるための事前復興の取り組み
  - 復興基本法など諸制度の整備
  - 物語復興 (渥美)
    - 地域で復興のビジョンを共有する
  - 弁当プロジェクト (永松)
- 被災地のエンパワーメントとそれを支える支援や仕組みの在り方に関する実践的な提案へ → **学会が最終的に目指すもの?**



現場  
実践



科学  
理論